

平成 26 年度 大学院工芸科学研究科博士前期課程 学位記授与式
学長告辞

本日ここに、学位を取得された皆さんに対し、大学を代表して祝意を表するとともに、皆さんをこれまで、支え、育ててこられたご家族の皆様はじめ、本日駆けつけていただいた関係者の方々に対し、心からお祝いを申しあげたいと思います。

そして、君たちが明日からの新たな一步を歩み始めるにあたり、「松ヶ崎から世界に飛翔せよ」この言葉を君たちに贈りたいと思います。

いまこそ京都工芸繊維大学は卒業生の皆さんとともに、世界に羽ばたき、飛翔しなければならない、また、その絶好の機会が巡ってきたからであります。

京都工芸繊維大学は、昨年秋に、スーパーグローバル大学に選定されました。京都工芸繊維大学は、今後 10 年間をかけて、キャンパス全体の国際化を図るとともに、専門分野別の世界におけるステータスを飛躍的に高めることがミッションとして定められたのです。

本学はすでに文部科学省から機能強化事業の推進大学の一つに選抜されており、世界的な競争力をつけ、世界で戦える大学になることが、社会から強く求められています。これは大学の名誉であり、素直に君たちと喜びを分かち合いたいと思います。

また、こうした絶好の機会が得られたのも、学生諸君、卒業生諸君の努力と実績の賜物であり、君たちに感謝するとともに卒業後の活躍についても大いに期待しているところです。

本学の卒業生は、これまでも、専門分野における基本知識と専門技能をよく修得し、優秀な技術者としてのキャリアを積み上げてきました。これは企業や社会から定評を得ている事実であり、私たちは、皆さんの能力や知識について、自信と確信をもっております。明日からの新たな一步を自信を持って踏み出して頂きたいと思います。

今日の修了式にあたって、本学の活動を振り返ってみてください。大学の活動は、教育・研究・社会貢献の 3 つの領域から構成されています。大学の組織はこれらの活動領域に対応して整備されるべきだと考えます。本年 4 月から、京都工芸繊維大学は、教育・学生に対しては学域制、研究教員組織に対しては学系制、社会活動に関しては機構制を導入し、柔軟な組織運営によって機能強化を図り、教育、研究、社会活動の国際化に注力していきたいと考えています。

教育プログラムでは、3×3、クォーター制、海外インターンシップや留学を推し進めています。例えば、大学院の入学試験では、TOEIC 平均値 730 点となるように、英語の特訓を行うとともに、毎年若手教員 10 名を海外に派遣し、事務職員 1 名も海外に派遣します。また毎年モデル研究室を指定して、国際交流事業を実施し、外国の研究室から大学院生を招聘して合同ゼミを開設します。

このように、本日修了される皆さんに、4 月からのカリキュラムを紹介するのは場違いのように思われるかもしれませんが、しかし、京都工芸繊維大学のみならず、全国の大学は、大学改革の最中であり、大学の個性を伸ばすために大学改革を行い、工夫を凝らしたカリキュラム改定によって新たな発想力を身につけた次の世代が社会に送り出されるでしょう。

また、京都工芸繊維大学の改革は、来るべき日本社会の大きな変革に備えるためのものであることを知っていただきたいと思います。

日本社会は、明治以来の大きな変革期を迎えようとしています。たとえば、現在見られる既存の職業は、その 3 分の 2 が消滅するのではないかと言われています。また労働時間に関しても、現状の半分以上、1 週に 20 時間以内の労働時間となるだろうとも言われています。こうした大きな社会変革を通じて持続可能な社会を作るためには、常に自らを鍛錬し、訓練し、教育し続けること、持続的な教育を自らに行い続けることができる人材が必要なのです。

これまでの学力のあり方に関しても、過度な知識依存型の学力観から脱却し、課題発見能力と課題解決能力が重視されるような「思考力、表現力、判断力」が求められることになります。これこそ、京都工芸繊維大学の卒業生が活躍できる社会の到来であります。本学における教育を振り返ってみてください。分野を問わず、実践的な授業が多く提供されており、自分が参加できなくとも、同級生や知り合いの参加の様子、国内外でのコンペの結果から判断して本学の教育水準が、世界的な水準に達していることがおのずと実感できるでしょう。

京都工芸繊維大学は、卒業後も君たちと協働し、イノベーションを通じて社会変革を推進していきたいと考えています。実際、大学に対して、イノベーションを創出し、その成果を社会改革に結びつけよ、という期待が非常に高まっています。これまでは、大学の研究成果は学会において発表され、その中から企業が選んで実用化するという考え方が主でありました。しかしこの方法では社会変革はなしえない、発想を逆転せよ、まず望ましい社会はどのようなもの

か、近未来の社会像を現実するためにはどのような技術が必要か、既存の技術を活用し、足りない技術は創り出し、理想社会を実現せよ、こうしたことを実行することがイノベーションであり大学にその役目が強く期待されています。

まずは、社会が求めているものの真の正体を見極めなければなりません。

これに関連して、デザイナーの佐藤オオキ氏は、NHKの（達人達という）番組で次のように語っています。あつたらしいなと思うもの、今までにありそうでなかったもの、これを発見し、実現することがデザイナーの仕事であると語っています。同時に、課題のないところには課題解決はない、とも言っています。

私たちは、科学者として、技術者として、また建築家やデザイナーとして、社会がほしいと言っているものを直接的、短絡的に提供するのではなく、他人がほしがっているものの背後に潜む本当の欲望に形をあたえ、具現化することが大切です。

そもそも主体の欲望とは、「自分は何を欲するか」ではなく「他者は私に何を欲するか」であります。平たく言えば、「私の喜びは、自分の欲望が満たされること」というよりも、「あなたに喜んでもらうことこそ、私の真の喜びです」ということになります。

こうした観点を踏まえて云うならば、心の内なる欲求に従う行為だけを、純粋なものとして美化してはいけません。社会の要請に応える研究、人の役にたつ研究は、尊い行いであり、また自然な行いでもあります。明日から皆さんがどのような技術者として、また研究者として歩みを始めようとも、現実に対して心を開き、柔軟でしなやかな精神で技術開発や研究開発に取り組んでいただきたいと思います。

結びに当たり、皆さん方が、修了後も大学を愛することを心から願っております。今一度、晩秋のイチョウ並木、夏の妙法、雪の比叡山、そして桜並木の高野川を思い返してください。母校への愛情は、自らの人生とこれからの活動に自信と誇りを与えます。皆さんは、私たちの誇りであり、京都工芸繊維大学が世界の大学であるという確信を持って卒業していただきたいと思います。

平成 27 年 3 月 25 日
京都工芸繊維大学長
古山正雄